



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	青山師範学校関係資料 解題(fulltext)
Author(s)	木暮, 絵理
Citation	東京学芸大学大学史資料室報, 7: 6-10
Issue Date	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/159359
Publisher	東京学芸大学大学史資料室
Rights	

1. はじめに

『青山師範学校関係資料』は、東京学芸大学が『東京学芸大学五十年史』を編纂するにあたり収集された資料群『東京学芸大学五十年史資料目録』のうち、東京学芸大学の前身校の一つである東京府青山師範学校に関するものである。総点数は648点にのぼり、年代を確認できる最も古いもので1901年（明治34年）のものから、1951年（昭和26年）に東京学芸大学発足に伴う閉校までの半世紀にわたる資料が確認できる。東京府の公立師範学校であった青山師範学校の姿をうかがうことができる貴重な資料といえよう。それだけではなく、青山師範学校が東京府における公立の教員養成学校であったという性質から、東京府内の尋常小学校に関する資料等も残されており、師範学校に限らない教育史に関する研究にも有用であろう。

本資料群には、いわゆる東京府青山師範学校時代（1908年～1943年）のみならずその前身である東京府師範学校時代、また1943年（昭和18年）発足の東京第一師範学校時代の資料も含まれている。そのため、厳密には『青山師範学校関係資料』とは呼称できないのかもしれない。ただし資料群の8割程度が青山師範学校関連の資料と考えられることなどを考慮し、『青山師範学校関係資料（以下、『青師資料』と略す場合がある）』と名称することとした。

2. 『東京学芸大学五十年史資料』と『東京学芸大学五十年史資料目録』の概要

『東京学芸大学五十年史資料目録（以下、『五十年史目録』とする）』は、令和2（2020）年2月に大学史資料室が新たに公開・閲覧を開始した『青師資料』の母体となっている資料群である。

東京学芸大学は来る2023年に創基150年を迎える。これは、明治6年（1873年）の東京府小学校教則講習所の設立から数えたものとなる。その後、東京府小学校教則講習所は青山師範、東京第一師範と姿を変え、昭和24年（1949年）に東京第一師範学校に加え、第二、第三師範学校、及び東京青年師範学校を母体として国立の新制大学、東京学芸大学が発足した。

この昭和24年を起点として50年目にあたる平成11（1999）年には東京学芸大学創立50周年の記念事業の一環として、『東京学芸大学五十年史』が編纂、刊行された。昭和45（1970）年には『東京学芸大学二十年史』が刊行されており、『五十年史』は東京学芸大学としては2冊目の大学史となる。『二十年史』は「創基九十六年史」と副題されており、東京学芸大学前史である師範学校時代についてかなりの紙面を割いている。「東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会」はそれをふまえ、『五十年史』に関する新たな編集方針を定めた。以下、若干長くなるがそれを引用する。

- (一) この『東京学芸大学五十年史』は、通史編と資料編の二分冊とし、いずれも単なる東京学芸大学五〇年のあゆみではなく、その背景にある戦後教育史、あるいは戦後教員養成史と関連させつつ記述、ないしは資料を選択する。

- (二) 一九七〇（昭和四五）年発行の『東京学芸大学二十年史』は、そのサブタイトルに「創基九十六年史」とあるように、かなりのページを割いて本学の前身の師範学校の歴史を懇切に記している。その重複を避けるため、『東京学芸大学五十年史』では、文字どおり大学となってからの五〇年のあゆみを詳述し、師範学校時代について、補章において大学前史として略述する。
- (三) 東京学芸大学の五〇年というあゆみの中には、わが国における戦後教育や社会情勢の大きなうねりに揺り動かされつつ、その上に本学なりの固有の事情による移り変わりがあった。すなわち、一九四九～六三年の整備・統合期、一九六四～七五年の拡充・発展期、一九七六～八六年の展開期、一九八七～現在の転換期、の四つの画期である（詳細は序章第二節参照）。もちろん、この画期はおおまかな動向であり、ここに示した年次も絶対的な数字ではなく、その年次の前後あたりというおよその目安の数字である¹。

また、編集委員会の委員長であった竹内誠は編纂過程で収集した資料について以下のように述べている。

とかく歴史編纂が終了すると、編纂過程で収集した資料が散逸するという事例をしばしば聞くことがある。そうしたことのないよう本編集委員会では、収集した資料をとりあえず附属図書館で一括して保存していただくようお願いした。今後こうした資料等をも含めて、東京学芸大学に教育資料館を設置しようという気運が醸成されるならば、望外の喜びである。

この言葉通り、『五十年史関係資料』は附属図書館に保管されていた。しかし、残念ながらそれを整理、活用するということまでには至らなかった。

その後、2010年頃から本学内の有志の教職員によって資料の救出活動が始まり、『五十年史』に関してもその際に大学史資料室に図書館から移されたのである²。

3. 東京府青山師範学校について

ここでは、東京府青山師範学校の歴史について、その歴史を概観していく。東京府青山師範学校の学校史については、青山師範学校監修の1936『創立六十年青山師範学校沿革史』と東京学芸大学二十年史編集委員会編1970『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史』に詳しく、本稿でもその2冊をおおいに参考にしている。

東京学芸大学の歴史は、明治6（1873）年4月、府庁構内旧町会所長屋跡に「小学教則講習所」を開設したことに始まり、また、これが東京府青山師範学校の始まりでもある。小学教則講習所は現職教員を対象とした教則の講習を主たる目的に設置されたものであった。それが教員を養成するための機関である師範学校となったのは、「東京府小学師範学校」が開校した明治9（1876）年3月のことである。同年11月には「東京府師範学校」と改称し、「小学師範」のみならず「中学師範」「女子師範」の養成も目指す形となった。

ところが、中学師範は結果的に設置されることなく、女子師範も数年間でその養成を停止してしまった。それにかわって多く募集されたのが速成生である。速成生は、6か月程度の短期間で教員を育成するいわば急場ごしえの教員養成であった。教員の需要増加に伴い、正式の師範生以上に速成生が要望されていたという。

明治10年代後半の速成生養成中心の時期を脱すると、徐々に中等科、高等科教員の本格養成に移行しはじめる。明治20（1887）年には一度「東京府尋常師範学校」と改称し、文部省の意向に従って新たな諸規定を定め

た。また、明治 22（1889）年には創設の地であった内幸町から小石川区竹早町へ移転している。

明治 30（1897）年、師範学校令に代わり師範教育令が実施された。それに伴い翌明治 31（1898）年には校名を再び東京府師範学校に戻した。明治 33（1900）年 8 月から翌明治 34（1901）年 4 月にかけて、東京府師範学校は竹早から赤坂区青山北町の新校舎へ移転した。

明治 41（1908）年 4 月に「師範学校規程」が施行されると、東京府師範学校では本科第二部の授業が開設された。これは、師範学校への入学に際し、中学校（女子は高等女学校）卒業を入学資格とするものである。この規程は当初その修業年限を 1 年間としていたが、大正 6（1917）年には 2 年間と定められた。さらに昭和 18（1943）年に師範学校が専門学校のひとつに位置づけられ、入学資格はすべて中等教育修了となり、戦後の新制大学昇格への出発点ともいえるものになった。

時代は戻り明治 41 年 11 月 14 日、府は「東京府豊島師範学校ヲ北豊島郡巣鴨村字池袋ニ設置シ明治四二年四月ヨリ開校ス」と告示した。それに伴い東京府師範学校は「東京府青山師範学校」と改称した。明治 42（1909）年 1 月には豊島師範と合同で生徒募集を行い、青山師範には本科第一部第二部併せて 60 名程度の入学者があった。

大正 9（1920）年になると豊島師範と合同で行ってきた生徒募集をそれぞれ単独で行うようになった。

大正 15（1926）年から青山師範学校の改築・移転の議論がはじまり、昭和 7（1932）年には現在も附属高校が置かれている世田谷区下馬に移転することが決定した。地元住民の反対活動等もあり、2 年後の昭和 9（1934）年になって工事が始まり、すべての工事が完了したのは昭和 11（1936）年 9 月のことであった。それに先んじて昭和 11 年 3 月に本校舎と寄宿舎が竣工していたため、青山師範学校は昭和 11 年 4 月に下馬に移転したのである³。

昭和 18（1943）年 4 月に施行された勅令第一〇九号によって師範教育令の改正が行われた。これによって師範学校はすべて都道府県立から官立に移管され、東京府師範学校も東京第一師範学校男子部となった。開校から 2 か月後の昭和 18 年 6 月には勤労働員が開始され、同年 9 月には理工系及び師範系を除く学生・生徒の徴兵猶予が撤廃された。昭和 20（1945）年 3 月には召集規則が改められたことによって師範学校の学生も兵役に就くことになった。また、教員の応召者も多かったという。

戦後、東京第一師範学校はカリキュラムの改訂に伴う学生・現任教員の再教育などを担ったが、昭和 24（1949）年に新制大学東京学芸大学の発足に伴い、昭和 26（1951）年 3 月に閉校した。

4. 『青山師範学校関係資料』の概要

『青山師範学校関係資料』には、前述のようにその前身である東京府師範学校時代、また 1943 年（昭和 18 年）発足の東京第一師範学校時代の資料等も含まれている。年代を確認できる最も古い資料が 1901 年（明治 34 年）のものであり、これは青山師範学校及びその前身校等の歴史を辿るうえで重要なものであることは、間違いない。

この資料群は、『五十年史』を編纂する際の資料として収集されたものであるが、すべての年代について網羅しているわけではなく、収集する際にもうけられたテーマを見出すこともできない。当時、東京第一師範学校が閉校してからすでに 50 年が経過しており、体系的に新たに資料を収集することは難しかったであろう。そのため、おそらく『二十年史』を編纂する際に収集された資料群を補完する形で資料を収集したと考えられる。

『青師資料』の資料はもともと年代ごとの整理などはなされていなかった。特定の行事やテーマ、元の所有者毎に小さな資料群がつくられ、それに入らない他の細々した資料が合わさった形で資料群が構成されている。これは、昨年（2019年）2月に公開された『撫子会保存資料』とは収集と整理の状況が異なったためであると考えられる。

『撫子会保存資料』に関しては小正 2019⁴ に詳述しており、本文の趣旨とずれるためにここでの詳述は避ける。東京府豊島師範学校・東京第二師範学校の同窓会組織である撫子会が収集した資料群であり、同窓会によって既に分類・整理がなされていたことをここに記述しておくだけにしよう。それとは異なり『青師資料』は、大学史を編纂する際に大学事務を中心として、言葉を選ばずにいえば雑多に集められた資料群である。推察するに入手経緯やその行事等に従って封筒に取められ、保管・利用されていたのではないだろうか。その際に作られた封筒は現存しているものもあれば、複数の異なる小資料群が後からまとめて別の封筒に入れなおされているものもある。残念ながら封筒に書かれている資料が現存していない場合もままある。

以下、特徴的な小資料群をいくつか紹介していきたい。

① 祝賀行事に関する資料（創立 50 年、創立 60 年）

青山師範学校創立 50 年と同 60 年の際に行われたそれぞれの祝賀行事に関する資料。祈念式及び祝宴会を行うに当たっての各係の分担表、予算、事業費用の内訳、挨拶状の下書き等。

② 運動会に関する資料

西海龍蔵あるいは西海という署名が散見されることから、大正 9（1920）年から昭和 9（1934）にかけて青山師範学校体育科の教諭を務めた西海龍蔵が収集した資料と考えられる。西海は東京府体育研究会の理事長を務めるなど体育界の重鎮であったため、附属学校の運動会のみならず、様々な尋常小学校の運動会の案内状やプログラムが取められている⁵。

③ 校友会に関する資料

校友会発行の校友会誌「校友」や校友会活動に関するメモ書き等。

④ 世田谷移転に関する資料

大正 15 年から昭和 11 年にかけての移転に関する資料群。新校舎の図面、新校舎の各教科の教室案、各室配置案、移転の際の物品の搬入要覧、移転当日の人の配置等。

⑤ 戦争時に関する資料

戦争時における師範学校と学生の状況が読み取れる貴重な資料が取められている。学徒勤労動員の出勤状況や勤労報国隊に関する規程、戦争死亡保険、戦死の記録等。

5. おわりに

『青山師範学校関係資料』には、師範学校史に関する資料だけでなく、日本教育史・日本体育史・日本近代

史等に関する資料も多々含まれている。本学関係者や師範学校史に関係する研究者ばかりでなく、広くこの資料群が利用されることを願っている。

一方、この目録は現在資料室のHP上で公開されているが、検索機能がなく、課題も山積している。今後、この貴重な資料が広く利用されるために、目録等の公開の方法を再検討する必要があるだろう。

注

- 1 竹内誠 1999「刊行にあたって」東京学芸大学創立五十周年記念誌 編集委員会編『東京学芸大学五十年史 通史編』（ページ数なし）
- 2 この経緯については大学史資料室発起人の一人である藤井健志氏による2012「大学史資料室—これまでとこれから—」（<https://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/history/>）、同藤井健志 2014「大学における資料保存の意味と意義」『東京学芸大学大学史資料室報』1、pp.1-10 に詳しい。
- 3 長谷川乙彦 1937「我が校新築移転の経過について」『校友 第二十二号 創立六十年／新築落成記念号』東京府青山師範学校々友会、pp.1-5
- 4 小正展也 2019「撫子会保存資料 解題」『東京学芸大学大学史資料室報』6、pp.9-14
- 5 1931『校友 第十七号』東京府青山師範学校々友会